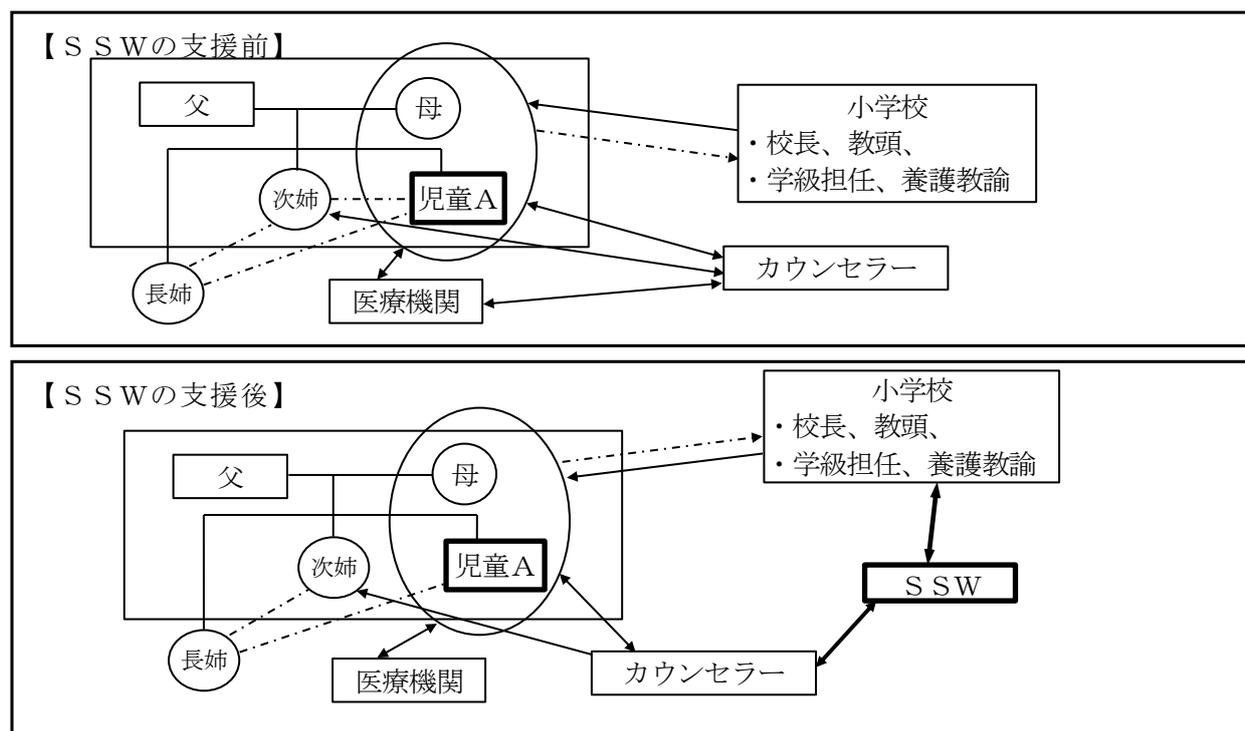


発達障がいに関係している不登校の改善を図ったケース



1 気になる状況

- 児童Aは小学校第3学年から、同じ学級の児童から嫌なことをされていたと訴えているが、自分に非がある場合でも他人のせいにする傾向が強く見られる。
- 児童Aは、小学校第5学年の学芸会後から欠席が多くなり、12月中旬には不登校となった。病院から紹介された臨床心理士からHSC (Highly Sensitive Child ※後にはアスペルガー症候群の可能性が大) と伝えられている。
- 自分の気に入らない状態があると、好意をもっている相手でも敵意をもつことがある。
- 保護者が児童Aの攻撃性を理解しておらず、「自分の気持ちを言葉にできない子」、「被害者である」という認識をもっている。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aは、5人家族で長姉は独立している。児童Aと次姉は気質が合わなく、別々の時間に食事をしている。
- 保護者も自己中心的な特質が見られるが、家庭内の雰囲気づくりは母親が中心になっている。
- 姉妹間で母親を取り合う状況が見られ、母親は調整に疲れている時がある。
- 児童Aは、当初HSC (Highly Sensitive Child) との診断を受けていたが、環境が変わるにつれて周囲に対して言葉の暴力が出てきた。
- 児童Aは、自分の好みに合った学校の体験学習などには参加する事が多い。
- 母親はインターネットで児童精神科の病院を探し、遠距離でも児童Aを受診させたり、その医師から紹介された地元のカウンセラーにも通わせたりしている。
- 母親と次姉にも特性が見られ、別日にカウンセリングを受けている。

(2) 学校との情報共有の状況

- SSWは、学校からの連絡後、母親の来室相談を経て、小学校第5学年の12月末から関わりを開始した。
- SSWは、児童Aが通室を開始して以降、教頭や学級担任と電話などで情報を共有している。
- 臨床心理士と学校が連携していなかったため、許可を得てSSWが臨床心理士から得た情報やアドバイスを学校に伝えて状況改善に努めている。

3 ケース会議の状況

- 第1回ケース会議
参加者：教頭、学級担任、保護者、SSW
内容：最新の情報共有と今後の役割検討、行事等での希望などの確認
- 第2回ケース会議
参加者：教頭、学級担任、保護者、SSW
内容：前回の反省とそれを踏まえた今後の対応の仕方、行事内容の確認
- 第3回ケース会議
参加者：教頭、学級担任、保護者、SSW
内容：進学に向けた情報共有と対応について、学校への要望などの確認

4 プランニング

【学校】

- 学級担任は週末に家庭訪問を行い、児童Aや母親と信頼関係の構築を目指す。保護者が希望する際には管理職も加わり対応する。
- 時間割を確認し、児童Aが登校希望した時間は受け入れ態勢を整えておく。
- 学級担任は空いている時間帯にできる限り学校適応指導教室を訪問し、児童Aと会話し、信頼関係の改善に努める。

【児童精神科】

- 月に1度診察を行い、カウンセリングに関しては児童A宅に近い臨床心理士を委託し、情報共有を行う。

【臨床心理士】

- 病院からの情報も参考に、月に1度、児童Aとカウンセリングを行い、SSWと情報を共有し、状況に応じた対応について、保護者にアドバイスを行う。

【SSW】

- 保護者の適応指導教室への送迎時に、保護者とできる限り直接交流するとともに、随時の家庭訪問・電話連絡を行い、保護者との信頼関係の構築に努める。
- 児童Aが登校する際には、学校（学級担任）との連携を深め、スムーズに登校できるように努めた。

5 社会資源の活用状況

【児童精神科】

- 児童Aの地元臨床心理士と連携し、療育を進めていく。

【臨床心理士】

- SSWにカウンセリングでの児童Aと保護者の様子や状態を報告し連携する。状況に応じて児童Aへの接し方等のアドバイスも行う。

6 当該児童の変容（成果と課題）

<成果>

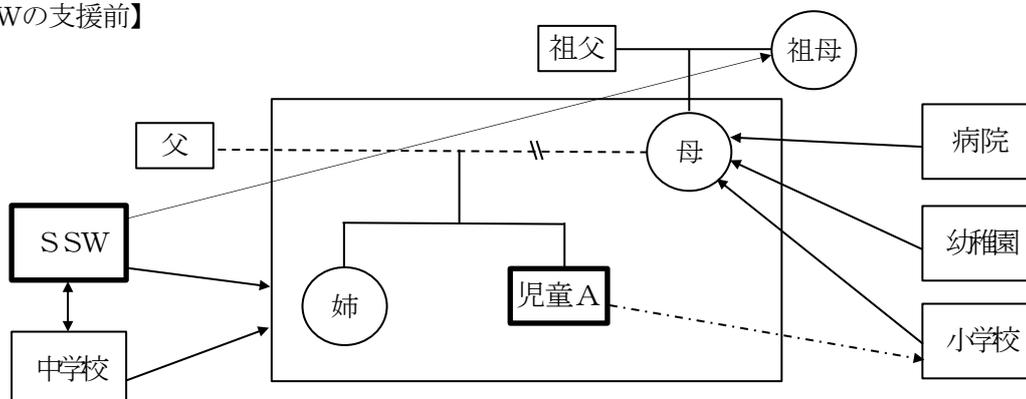
- 児童Aは、適応指導教室での通室児童との関わりの中で、自分も言葉で人を傷つける事があるという事を自覚し始め、以前は、何か問題があると全て周囲のせいにしてきたことを少しずつ振り返り、自己反省をする事ができるようになってきた。
- 以前は、新しい事、分からない事は全て「嫌な事」という発想だったが、語彙が増えるにつれて表現の仕方が変わり、気持ちを適切に伝える事ができるようになってきた。
- 体も小さく疲れやすい体質だったが、体育の授業などに積極的に参加し、体力もかなりついてきた。

<課題>

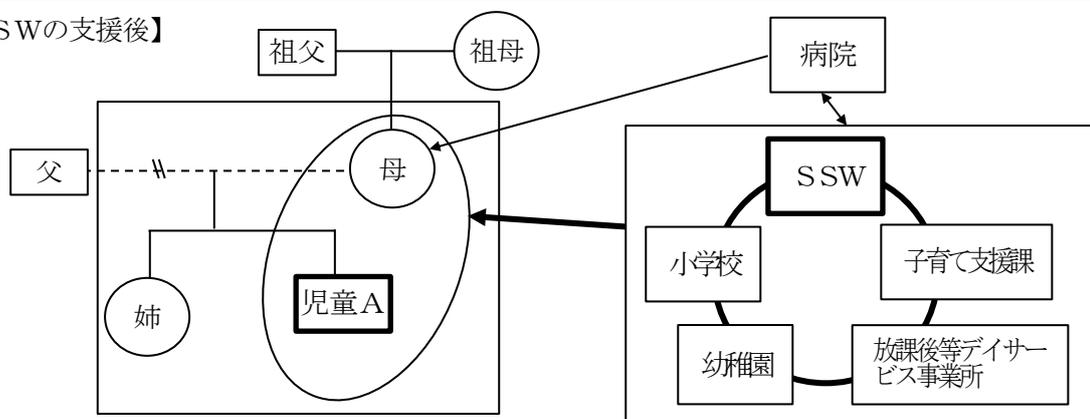
- 児童Aに問題が起きた際に、児童Aが保護者に対して自分本位な内容を伝えてしまうことで、保護者が感情的になり、周囲とこじれてしまうことがあることから、丁寧に関わる必要がある。
- 児童A、保護者共に、感情のコントロールが不得手であり、保護者が、児童Aの特性に気付いていないことから、医療機関を含めた関係機関との連携を強める必要がある。

学校と関係機関が連携して発達障がいがある不登校児童を支援したケース

【SSWの支援前】



【SSWの支援後】



1 気になる状況

- 児童Aは、幼稚園の頃から登園を渋ることがあり、小学校入学後も不登校傾向が続いていた。
- 児童Aが欠席する理由については、その時の気分が大きく関わっており、不明確なことが多かった。また、連続して欠席する理由や登校を再開する具体的な理由も把握できていなかった。
- 母親は、児童Aの落ち着きのなさや気持ちのコントロールが苦手なことを心配していた。
- 児童Aの姉（高1）が、中学校時代に人間関係の悪化で不登校となった際、SSWが介入したことから、当時から児童Aや母親の様子は把握していた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aの家族構成は、母親、児童A、高等学校第1学年の姉の3名であるが、姉は遠方の学校へ進学しており、現在は別居中である。
- 母方の祖父母が近所に住んでおり、当該家庭を支援している。
- 児童Aは、精神科から「注意欠陥多動性障害」と診断されており、定期的に受診している。また現在、児童Aは特別支援学級に在籍している。
- 母親は、パートとして勤務をしているが、経済的に厳しい状況である。過去に生活保護の相談に行ったが、受給には至らなかった。
- 母親自身も精神的に不安定であり、時々パニックを起こすことがあるため、精神科に通院中である。母親自身の不安感から、SSWに連絡をしていくことがある。

(2) 学校との情報共有の状況

- 児童Aが学校を欠席するときは、母親から連絡が入るが、母親が精神的に不安定なときは、連絡が取れず、学校から連絡をすることがある。
- 学校は、定期的に児童Aの自宅を訪問するとともに、SSWから児童Aの様子や家庭の状況について情報を得ている。
- 児童Aが担任に対して拒否感を示すことがあるため、担任の対応が難しい時は、教頭や養護教諭が対応している。

3 ケース会議の状況

- 第1回ケース会議
 - ・ 構成員：教頭、担任、養護教諭、特別支援コーディネーター、幼稚園教諭、SSW
 - ・ 内容：児童A及び家庭状況について情報共有をするとともに、今後の支援方針と方法について検討した。
- 第2回ケース会議
 - ・ 構成員：子育て支援課職員、SSW
 - ・ 内容：児童A及びその母親への支援について情報共有するとともに、それぞれの役割と今後の支援の具体策について検討した。

4 プランニング

- 学校
 - ・ 児童Aが登校した際に、担任と一緒に落ち着いて学習及び生活することができる環境を整備する。
 - ・ 家庭と連携し、児童Aの生活習慣の改善に向けた取組を行う。
- SSW
 - ・ 受容的な対応や定期的な相談をとおして、児童Aや保護者との信頼関係を構築する。
 - ・ 母方の祖父母との連絡を密にし、連携して児童Aや家庭への支援を行う。
 - ・ 児童Aや母親の状況に応じて必要な支援を整理し、関係機関と学校の情報共有及びそれぞれの役割の確認を行う。
- 子育て支援課
 - ・ SSWを中心に学校や他の関係機関と連携し、児童Aや家庭に係る情報を共有するとともに、児童Aの登校に向けた支援を連携して行う。

5 社会資源の活用状況

- 児童Aの支援や母親の負担軽減のため、事業所を利用した。
- 放課後等デイサービス事業所や子育て支援課と緊密な連携を図り、情報交流を行い、支援の方向性を検討した。

6 当該児童の変容（成果と課題）

<成果>

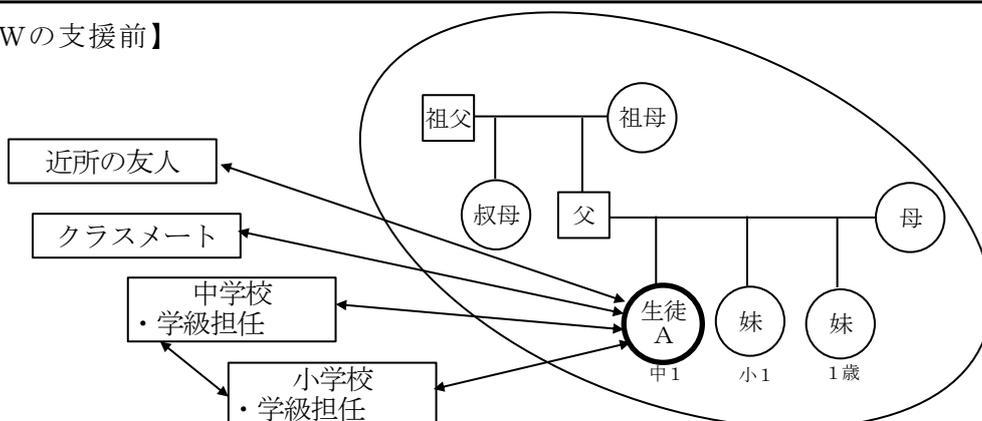
- 児童Aは、放課後等デイサービスを楽しみにするようになったことにより、登校することができるようになった。
- 学校や各関係機関が連携し、組織的な支援を行ったことにより、母親の精神的な安定が図られ、児童Aへの支援につなげることができた。

<課題>

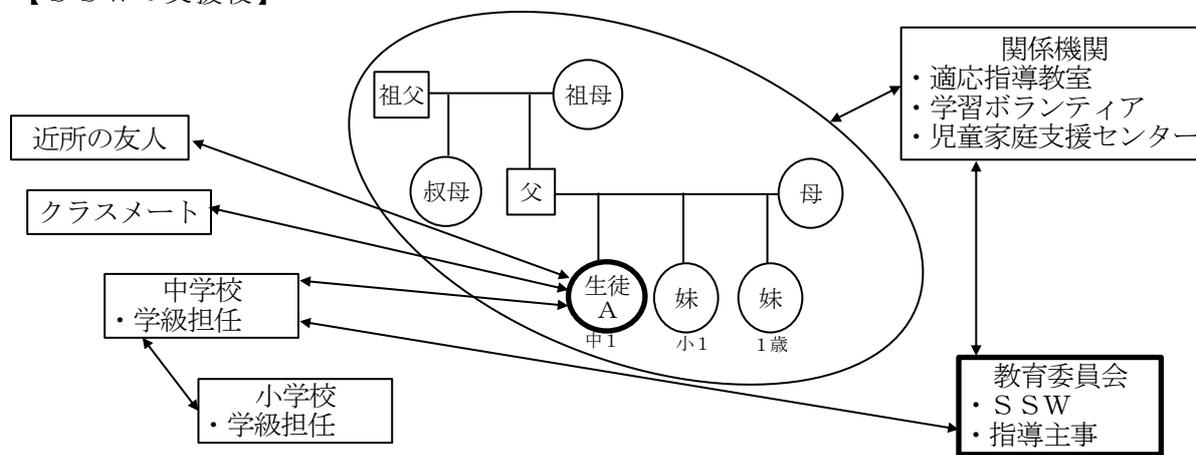
- 不登校の原因は学校生活だけではなく、母親の養育や家庭環境に及ぶものが多いことから、今後も学校と関係機関が連携を図り、粘り強く児童Aの家庭を支援する必要がある。
- 今後も切れ目のない一貫した支援が必要となることから、児童Aのよさや成長等について確実な引継ぎを行うとともに、一貫した支援の体制を構築する必要がある。

生徒のコミュニケーション能力を育てるために、家庭に働きかけたケース

【 S S Wの支援前】



【 S S Wの支援後】



1 気になる状況

- 生徒Aは、小学校の低学年から体調不良による欠席が多い状態であった。特別な配慮が必要であり、第5学年まで通級による指導を行っており、第6学年からは特別支援学級に在籍を変更した。
- 生徒Aは、中学校進学に向けて適応指導教室を見学したが、生徒Aのイメージとは異なったことから、校区の中学校に進学した。生徒Aは、大勢の中にいることに苦手を感じているが、他者との関わりを求める傾向がある。
- 生徒Aは、外見のことでいじめられたと感じており、容姿や服装などへの執着心が強い。
- 生徒Aは、自身の経験談や体験談を誇張して話す傾向が強い。
- 社会のルールや校則を守ることに對する家族の意識が低い。
- 生徒Aと保護者は、学校が丁寧な対応をしていないと考えているが、学校としては、生徒Aは生徒間のトラブルが多く、その都度保護者が一方的に学校へ要望を伝えるなど対応に苦慮しており、関係機関と連携する必要性を感じている。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aは、学級担任や学校に対する拒否感が強く、特に異性への苦手意識が強い。しかし、拒否感を示しそうな相手であっても平気な場合もある。
- 生徒Aは、SNS等で連絡を取っている友人はほぼおらず、近くの公園で会う小学生や高校生などの仲間と遊ぶことが多い。

【 中学校⑫ 】

- 学校のクラスメート、特に異性の生徒とのトラブルが多発しており、生徒Aは、他の生徒全員から嫌われていると考えている。
- 生徒Aは、友人と楽しく会話することや場所を考慮して話をする事、また、相手の気持ちを考えることに苦手意識を感じている。
- 生徒Aは、本心では他者との関わりを求めていることから、コミュニケーション能力を高める必要がある。
- 生徒Aは、校則を守らない服装や髪型をしており、そのことにより、クラスメートとの距離ができてきていることに気付いていない。
- 父親は自営業を営んでおり、母親は祖母の病院への送迎などに充てる時間が多い。
- 生徒Aは、父方の親戚と同居している。
- 生徒Aは、家族や親戚の影響から校則を守るなどの意識が非常に低い。

(2) 学校との情報共有の状況

- 指導主事を中心に学校訪問し、学級担任・主幹教諭・教頭と情報を共有している。また、生徒Aが登校した際の対応について確認している。

3 ケース会議の状況

- 学校との話し合いや教育委員会内でのケース会議を行い、進捗状況や今後の対応を検討した。

4 プランニング

- 指導主事とSSWが学校訪問し、今後の対応について確認を行う。
- 指導主事とSSWが家庭訪問し、服装や髪型を含めた指導の方針について母親と確認を行う。
- 指導主事とSSWが家庭訪問し、学習や家族以外とのコミュニケーションの機会を確保するため、生徒Aに児童家庭支援センターへの通所を提案する。
- 生徒Aが児童家庭センターへの通所を受け入れた場合、適応指導教室の利用や学校への別室登校を提案する。

5 社会資源の活用状況

【教育委員会】

- 指導主事とSSWによる面談
- 児童家庭支援センターへの通所の提案

【児童家庭支援センター】

- 安定した通所の提供

【学習ボランティア】

- 継続的な学習支援

【適応指導教室】

- 通所に向けた見学

6 当該生徒の変容（成果と課題）

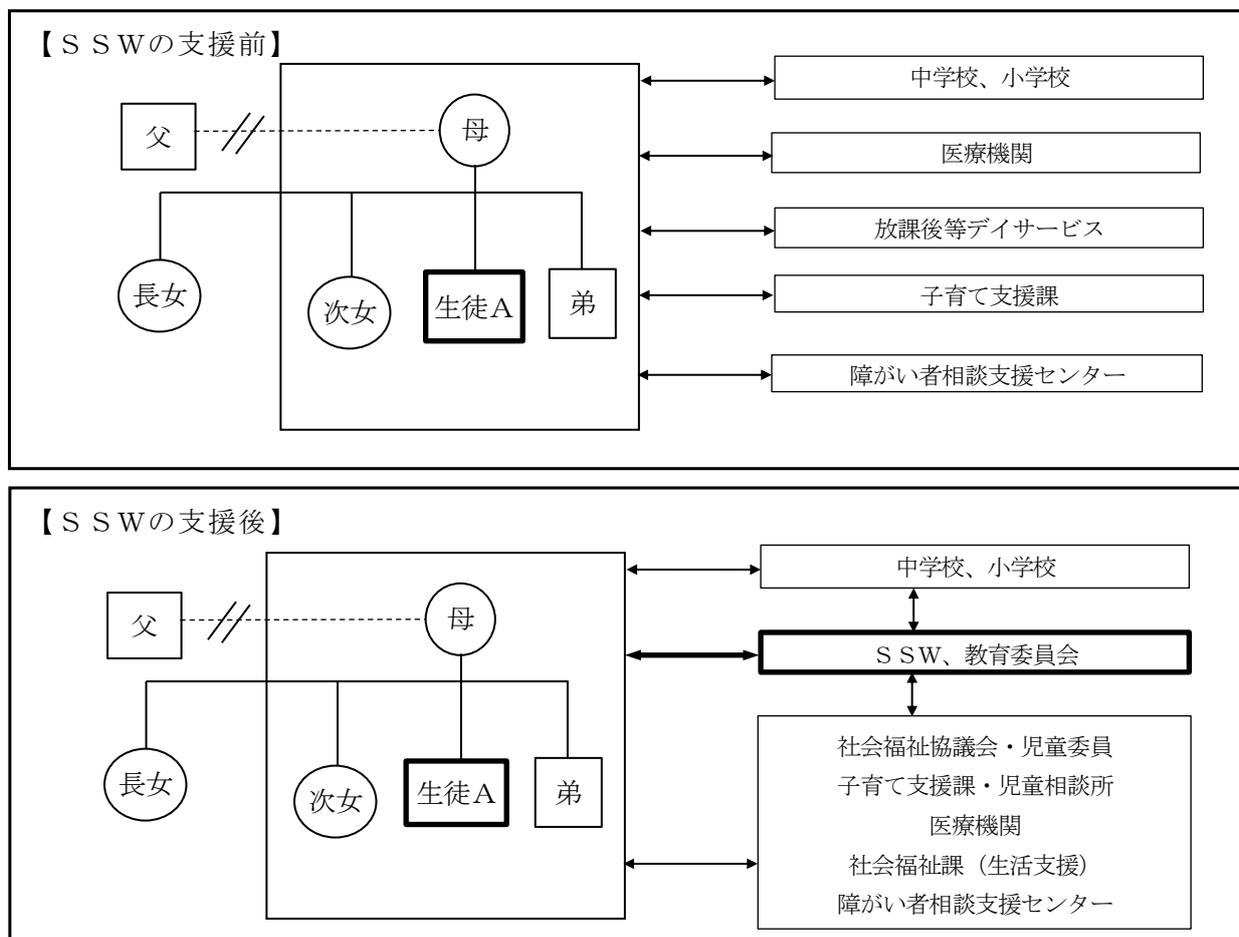
<成果>

- 生徒Aの居場所づくりとして、児童家庭支援センターにおいて、学習ボランティアとの関わりを充実させたことにより、家族以外とのコミュニケーションを自発的にとることができるようになった。
- 週1、2回、学校に別室登校できるようになった。
- 児童家庭支援センターなど、継続的に学習できる環境を提供することができた。

<課題>

- 登校した際、学級での活動に強い抵抗感をもっていることから、人数が少ない適応指導教室を主な居場所として、少しずつ学級に慣れることができるよう、計画的に支援する必要がある。

特性のある不登校生徒を抱える家庭との関係構築を図ったケース



1 気になる状況

- 生徒Aは、幼児期に兄弟だけで出かけ、市内で保護されたり、子どもだけで危険な行為を伴う遊びを行ったりするなど、子育て支援課が関わるケースがあった。
- 生徒Aは、小学校入学後も、迷惑行為や問題行動が続き、言語面や行動面、排泄面での問題が見られたりするなど、校内生活においても特別な支援が必要と判断されるようになり、小学校中学年から特別支援学級に在籍となった。
- 生徒Aは、小学校高学年時より不登校となり、中学校入学後も不登校となった。学校は、家庭訪問を行っているが、母親が対応するのみで生徒Aに会うことが難しい状況となった。
- 学校は、保護者に対して医療機関等の受診を勧めたが、受診はしていない。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 家庭状況
 - ・母子家庭だが、実父も同じ自治体内に所在している。
 - ・困窮した生活状況が続いていることから、母親は、様々な窓口で生活支援に係る相談を受けているが、生徒Aの発達についての継続相談は行っていない。
 - ・母親が積極的に問題解決に取り組む姿勢が希薄で、母親が支援を受けた機関は多いが、いずれも単発的であり、関係機関の相互連携には至っていない。
 - ・母親は、近隣との交流もなく、関係機関からの関わりを拒絶することがあり、SSWが訪問した際も、関わりを快く受け入れない状況が見られた。

- 生徒Aの状況
 - ・生徒Aは、小学校途中から特別支援学級に在籍しているが、医療機関は受診していない。
 - ・生徒Aは、不登校となった以降に家庭訪問をしても姿を見せることはない。
 - ・生徒Aは、学習経験や生活経験が極端に不足していることが考えられ、様々な支援が必要と考えられる。

3 ケース会議の状況

- 学校からの関わりだけでは不登校対応の困難さが見られたことから、SSWが関わり、学校と連携して家庭訪問を実施し、生徒Aの状況や家庭環境を確認した。
- SSWが総合的な課題を洗い出し、子育て支援課が支援強化を図り、関係機関とケース検討会議を実施した。
- 参加者
 - ・主催・・・子育て支援課
 - ・出席機関・・・児童相談所、保健所、民生・児童委員（社会福祉協議会）、学校、医療機関、障がい者相談支援センター、社会福祉課、教育委員会職員、SSW、子育て支援課
 - ・検討事項・・・生徒A及び家庭への支援方策及び役割分担
- 内容
 - SSW、学校、教育委員会、子育て支援課及び社会福祉協議会等の関係機関がそれぞれ主体的に関わり得た情報を共有することとした。

4 プランニング

- 次のように役割分担することを基本とし、各方面から対応することとした。

機関	役割分担
全関係機関	世帯の状況把握、変化に応じた情報交換
学校、児童委員、SSW（教育委員会）、社会福祉課、子育て支援課	生活状況の確認（家庭訪問等）
警察、学校、SSW（教育委員会）、子育て支援課	当該児童の危険行動時の対応
医療機関、児童相談所、子育て支援課、児童心理治療施設	当該児童の施設活用勧奨
児童相談所、要保護対策連絡協議会	各機関へのアドバイス

5 社会資源の活用状況

- 民生委員、SSW、学校が、随時母親と連絡を取ることで、日中の世帯状況を継続して把握できるようになった。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

- SSWが不登校生徒支援に向けた関わりを始めたことにより、ケース会議が開催され、情報共有の体制が整った。
- SSWや学校、民生児童委員等による生徒Aの状況把握を通して、母親との関係構築につながり、生徒Aの状況確認の機会が増えるとともに、近隣での問題行動が減少した。

<課題>

- 家庭支援の体制を整えることはできたが、生徒Aが学校復帰することができていないことから、引き続き、学習支援を含めた支援を継続して行う必要がある。
- 義務教育段階を終えた後も支援が必要であると考えられるため、引き続き医療機関等と連携する必要がある。